（別紙様式）

令和５年度かながわ学びづくり実践研究推進校　実践報告

三浦市立三崎小学校

研究テーマ：「子どもが子どもの言葉で語り合う」

～「伝えたい」「聞きたい」を大切にしあえる授業づくりの実践～

１　実践の目的

本研究では、児童の話す・聞く力を育て、言葉を介して他者とより良い人間関係を形成することができることを目的としている。人は言葉を介して他者と関わり合いながら生きていく。話し合う中で、多くの場合、それぞれの立場や意見にちがいがある。他者とのちがいを認め、互いが納得できるように合意形成を図るというのは、多種多様な人たちと関わるうえで重要な能力であると考える。

そこで、本研究では、大きく２点に焦点を当てて研究を進めていく。１点目は、児童が思わず自ら「語りたい」と思える授業の展開や単元づくりについて。２点目は、児童が自ら「語りたい」と思える環境づくりについてである。以上の２つに焦点を当て、児童の話す・聞く力を養っていくことにする。言葉を介して、他者と絆を深め、よりよい人間関係を築ける児童を育てていきたい。

２　実践の内容

児童同士で語り合える授業を目指して、以下のように取り組んできた。

①『児童が自ら語るための授業づくり』

・児童が思わず他者に「語りたい」と思える魅力ある単元づくりを行うこと。

『児童の関心が高まる題材』の観点

〇児童にとって身近なもの
〇流行のもの
〇体や手を動かす体験的なもの

・学びが深まる、達成感を感じられる「語り合う」教材、題材選びを行うこと。

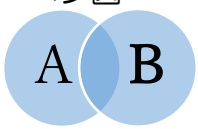
『児童の学びが深まる・児童が達成感を感じられる題材』の観点

〇語り合うことを通して、課題を解決することができる
〇語り合うことを通して、自分の見方が変わる、または視野が広がる

・自分の考えや立場を明確にしたり、話し合いが焦点化しやすくしたりするための手立てを取ること。

思考ツール

ベン図



座標軸

スケール

最小							最大

②児童が自ら語りたいと思える環境づくり

・系統的な「話す・聞く」の系統的な学習に取り組むこと

本校の「話す」「聞く」の系統表

・学校全体で児童が「語る」「語り合える」場づくりを行うこと

〇放送委員の設立

〇キッズ発表会の充実

３　実践の成果

（１）４年生による研究授業

児童数１５人の４年生。国語科の『アップとルーズで伝える』で単元を構想した。本単元では、思考ツールである「クラゲチャート」を活用することで、児童が自分の考えを整理できること、さらには、話し合う内容を明確化、焦点化できることで、児童らの語り合いが充実するのではないかと考え実践した。

本単元を通して、成果として以下の点が挙げられた。①思考ツールによる視覚的な支援によって、児童が友だちの立場や考えが分かりやすくなり、互いに交流がしやすくなった。さらには、クラス全体での話し合いが進んでいく中でも、思考ツールを用いたことで、会話の流れが児童にとって把握しやすくクラス全員が参加できたことが挙げられた。②児童が自分の立場や考えを整理するために、ワークシートに考えを記入するなど、一定の時間を設けることが有効であることが分かった。

一方で、三崎小の児童にとってどのような姿が「語り合う」姿なのか、まだまだ、校内で共有すべきだと指摘があった。研究の年度当初の提案や指導案検討の際に「活発な話し合い」と抽象的に論じるのではなく、児童の具体の姿（発言、つぶやき、姿勢など）で検討すべきだと、課題として残った。

（２）１年生による研究授業

児童数９名の１年生。国語科の『ずうっと、ずっと、大すきだよ』で単元を構想した。本単元では、“１年生という発達段階”と“少人数”の面を考慮し、主に以下の手立てをとることとした。①１年生が主体的に読めるように、「ぼく」の飼い犬を思う気持ちが分かる叙述を探す、「大好き探し」を単元の中心に据えること。②９人全員が語り合いに参加できるように、視覚的な支援を豊富にすること（全文掲示、板書におけるネームプレートの活用など）、教科書だけでなく、絵本に乗っている挿絵を全部活用したことである。

本単元を通し、得られた成果として、以下の点が挙げられた。①児童が自ら語りたいと思える魅力ある単元づくりができた。探検家が宝を探すように、単元を通して「ぼく」の気持ちが分かる叙述を探す活動によって、児童が単元を通して主体的に取り組むことができた。また、主体的な読みによって教科書の内容を全員が十分に理解できた。②本時の主発問が「なぜ、大切なバスケットなのに、となりの子にあげたのか」という思考のズレを活かした問いであった。自分の見方や考えが変わる問いによって、児童が語りたいと思えていた。③視覚的な支援、多くの挿絵の活用は、文字による理解が苦手な児童にとって有効な手立てであった。

一方で、課題は指導案検討に時間がかかってしまったことにある。振り返ると、「語り合う」ことそのものが目標になってしまうことがしばしばあった。何のために「語り合うのか」といった、“手立て”と“達成したい事”を混同しないようにすることが大事であると共通理解がはかれた。

４　今後の展開

実践を通して、職員の間で、児童が語り合うための手立てが充実した一年であった。来年度は、児童の価値あるつぶやきや、姿勢、発言など、語り合っている具体の姿について、研究を精査し、職員で共通理解を図りたいと考えている。さらには、児童たち自らが充実した語り合いに必要な言動を意識できるように、教師と児童とで三崎小学校ならではの理想の授業を共有していきたい。